２０１６年４月２３日（土）／京都「被爆２世・３世の会」２０１６年度年次総会

記念トーク　父の死が放射線のためだと知った時
川口美砂さん×守田敏也さん

●川口美砂さん
室戸市出身。映画『放射線を浴びたＸ年後２』に出演。太平洋核実験で被曝した漁船員を訪ね、聞き取りを行なっている。

●守田敏也さん
フリーライター。京都「被爆２世・３世の会」会員。

守田
　みなさんこんにちは。「被爆２世・３世の会」の守田敏也です。今日の総会の第２部の記念トークに移りたいと思います。まず今日ゲストとしてお招きした川口美砂さんをご紹介します。

川口
　はじめまして。川口と申します。本日はよろしくお願いいたします。

川口さんにビキニのこと、お父さんのことを伺おうと

守田
　まず初めに、今日川口さんをおよびした経緯についてお話しします。
　川口さんは『放射線を浴びたＸ年後２』という映画に出演されたのですが、そのパンフレットに書かれている記述の一部を読みあげます。
　「１９５４年アメリカが行ったビキニ水爆実験。当時、多くの日本の漁船が同じ海域で操業していた。にもかかわらず、第五福竜丸以外の「被ばく」は、人々の記憶、そして歴史からもなぜか消し去られて行った。闇に葬られようとしていたその重大事件に光をあてたのは、高知県の港町で地道な調査を続けた教師や高校生たちだった。その足跡を丹念にたどったあるローカル局のＴＶマンの８年にわたる長期取材のなかで、次々と明らかになっていく船員たちの衝撃的なその後・・・。そして、ついにたどり着いた、“機密文書”・・・そこには、日本にも及んだ深刻な汚染の記録があった―」

　僕自身もそうなのですが、みなさんも「第五福竜丸」という船の名は強く記憶に残っていると思うのですよね。アメリカのビキニ環礁の核実験で被曝した船です。ところが被曝したのは第五福竜丸だけではなかった。記録に残っているだけでも延べ９９２隻もの船が数え上げられています。記録にはない船ももちろんたくさんあるはずで、膨大な量の日本の船が巻き込まれていて、推定１万人から２万人の漁師さんたちや船員さんたちが被曝していたのです。漁船だけではなくて貨物船などもあの海域にいて、その船員の方たちも被曝している。それなのに、まるで被曝したのは第五福竜丸一隻だけかのように扱われてきてしまいました。

　このことに高知県の山下正寿先生他、２名の先生が気がつかれました。当時は高校の先生をされていて、自分が教えている高校生たちと一緒になって被曝の事実を一つ一つ丹念に調べ上げ、たくさんの被害があったことを明らかにしていったのです。

その活動の成果をまとめるとともに、高知県室戸市の遠洋マグロ漁船・第二幸成丸の乗りこまれていてマーシャル漁場で被曝された有藤照雄さんなどの５０年の沈黙を破っての証言をはじめ、たくさんの乗組員の方やご家族の証言や、アメリカ公文書に記載されていた水爆実験によるアメリカ本土や日本全域の被曝の事実など、衝撃的な内容を入れ込んで作り上げたのが、映画『放射能を浴びたＸ年後』です。川口さんが出演されたものの前作です。まずこちらを先に観て欲しいのですけれど、核実験で被曝したのは高知県の船だけではなかったのです。日本の太平洋側のあらゆる港から実験海域に船が行っていた。だから日本中の港に被曝した船がいて、漁師さんたちがいたのです。

これを山下先生たちが２０年以上の歳月をかけてずっと調べあげていったのですが、ここに途中から南海放送のディレクターの伊東英朗さんという方が参加されたのです。映画のタイトルに使われた「Ｘ年後」という言葉は、その伊東さんが思いついたもので、被曝してから何年か後に影響が出てくることを指した言葉です。漁師さんたちの場合、早ければ船が帰って来てからすぐに亡くなった方もいますし、その後に次々と亡くなられていった。とにかくまだまだお若くして亡くなられた方が多いのですね。４０代、５０代と。

ところが伊東さんらがさらに調査していくと衝撃的なことが分ってきた。アメリカという国は２５年経つと公文書を公開していく国なのですね。そこで出てきた文書から分ってきたのは、実はなんと、ビキニ環礁水爆実験の時にアメリカは、アメリカ本土のかなりの場所で放射性物質を捕まえる用意をしていたのです。そして日本でも沖縄、広島、長崎、そして米軍基地のある三沢とかに用意をしていました。南太平洋での水爆実験が各地にどのような影響を及ぼすのかデータをとっていたのですね。そのデータを見るとアメリカのかなりの部分が被曝しているし、日本全土が放射能の雲に覆われてしまった日も何日もあったのです。

もちろん一番濃度のきつい放射能にさらされ、激しい被曝をされたのは船員さんたちです。あたりの海域が汚染されていましたが、彼らは放射能の入った水でお米を研いで食べたり、スコールのない時には海水で体を洗っていました。ですから物凄い被曝量です。でも彼らだけではなく、日本中が被曝していたのですね。だから私たち全員が被曝者なのです。それが映画『放射線を浴びたＸ年後』で告発されたのです。この映画、『放射線を浴びたＸ年後』（以下『Ｘ年後１』）と、第２作の『放射線を浴びたＸ年後２』(以下『Ｘ年後２』)は、全国で自主上映が呼びかけられていますので、ぜひ協力していただきたいです。

さて川口さんはそれまで特にこの映画に関心があったわけではなかったのですが、故郷の室戸に行かれた時に、妹さんに誘われて観に行かれました。そこからこの映画との関わりが始まったのですね。川口さんのお父さんも室戸の漁師さんで、３６歳で亡くなられているのです。川口さんは映画を観て、たくさんの証言を集めている伊東監督の手助けをしたいと考えて、室戸の漁師さんたち、「おんちゃん」たちを取材されていくようになりました。そのとき川口さんは映画に出るつもりなど全然なかった。なかったのですけれども、途中から監督さんから「美砂さんでいこう」ということになって、映画ができてしまって、今、戸惑っているのだそうですが、ビキニ環礁の核実験の被曝のこと、漁師さんたちのこと、映画のことなどを、私たち京都「被爆２世・３世の会」でぜひお聞きしたいということから今日は川口さんをお呼びしようということになったわけです。

記念トークのタイトルが「父の死が放射線のためだと知った時」とありますが、実は僕も同じな

のです。僕の父も原爆が落ちた時、広島の呉市にいたのですね。正確に言うと香川県の善通寺というところにあった陸軍基地から呉まで、救助命令が出て行ったのです。父は呉に止まったのですけど、何の因果か、僕の友人のお父さんが呉に先にいた海軍部隊にいて、トコロテン式に押し出されるように広島市内に入ってるのです。そして被爆しています。僕の父は呉からは動かなかったので、父自身も被爆したとは思ってなかったし、僕も家族もそう了解していました。その父が亡くなったのは広島の被爆から３５年後のこと。１９８０年５月。死因は脳溢血で享年５９歳でした。

ところが福島原発事故以降のことなのですが、名古屋大学名誉着教授の沢田昭二先生に父のことを話していたら、「守田さん、呉には確実に放射能の雲が届いているんですよ。だからお父さんも被爆されてるし、あなたも被爆二世ですよ」と言われたんです。あー、そうだったのか、ということで、僕も５０歳を過ぎて初めて事実を知ったというわけです。

そういうことを踏まえて、今日は川口さんにいろいろとお話を伺いたいと思います。

まず最初に映画を観に行かれたきっかけから伺いたいと思います。

『放射線を浴びたＸ年後』を観に行って

川口

今日はお声かけ下さってどうもありがとうございます。これまで歩んできたことを、約２年の歩みですが、守田さんの質問に応える形でお話しさせていただきたいと思います。

守田さんも先ほどお話しされましたように、この映画『Ｘ年後１』の方ですけど、それを観たのがきっかけとなって室戸のおんちゃんたちの聞き取りをすることになったのです。２０１３年の８月、お盆休みに室戸に帰っていた時に、妹が「お姉ちゃん、漁師のおんちゃんたちの映画があるけど観に行かん？」って声をかけてくれたのです。８月１８日、その日の最終便で東京に戻る予定でしたが、午後１時からの上映スタートだったので、「間にあうねえ、行こうか」と。内容も知らず、まったく先入観もなく観に行きました。観た後のショックを今でも憶えています。

私は室戸の漁師の子として生まれ育ちました。ビキニのあの大きな事件は、第五福竜丸だけのことだとその時まで思い込んでいたのです。単純に私が勉強不足だったのか、知らされてこなかったのか。

観終わった後に一番感じたのは、この映画を作った監督に会いたいということでした。映像の力を非常に感じましたので。それを最初に思いました。そして『Ｘ年後１』を観られた方はお分かりだと思いますが、同じシーンが『Ｘ年後２』にも挿入されていて、監督が愛媛県から高知まで何度も足を運ばれて取材を行なわれました。でも初めのうち、おんちゃんたちは「今更遅い」と断ったり、時には烈火のごとく怒ってなぐりかからんばかりに追い返そうとしたのですね。監督は「５０年前に来い」とか、「お墓の下にまで降りて来い」とか言われているのです。ずいぶんなご苦労を感じ取ったものですから、これを知ってしまった以上は見過ごすことができないと思い、何かお手伝いがしたいと思ったのです。

私がどういう形で何かできるのか、何の自信もなかったのですが、監督の聞き取りの補佐ならばできるのではないか、室戸市であれば、私は出身者なので、聞き取りすることは可能なのではないかと思ったのです。マグロ船の漁師さんたちにとって、室戸は一時期はマグロの漁獲高の黄金期を迎えた街でした。その頃の漁師たちが何人かいるのではないかとも思いました。それが聞き取りをするきっかけでした。

守田

映画を最初に観た時にお父さんとの結びつきは考えられなかったですか？

川口
　そうですね。父も漁師だったので無関係ではないだろうけど、まさか「被曝」という文字と父と関係があるとはまったく想像しませんでしたね。

守田
　最初はお父さんの被曝と結びつけられたわけではなかったのですね。
　それで、監督さんに連絡されて、監督さんはどんなふうにおっしゃったのですか？

川口
　室戸の上映会の当日は監督は多忙で来ておられなくて、配給会社の方がおられたのでその日はその方と名刺交換だけしました。東京に戻ってから配給会社の方に監督へのアプローチの仕方などお尋ねしました。ただ監督は非常にお忙しくてなかなか思うようにことが運ばなかったのです。それでもめげずに何度も何度も連絡していたところ、ある日やっと連絡があり、２０１３年の１０月のある日、上京されていた監督と初めて、お会いすることができたのです。

守田
　伊東監督は愛媛県にある南海放送という放送局のディレクターでしたね。

川口
　初対面は東京。吉祥寺の喫茶店でお話ししました。その時、映画の感想と、私が室戸の出身であること、父が漁師だったことなどを話しました。
　監督は非常に誠実で、ぼくとつとした方でした。第一印象はとても良かったです。話しの中で「川口さんのお父さん、漁師さんだったら何という船に乗っていたのですか？」と聞いて下さいました。父が亡くなったのが３６歳の時、私が１２歳でした。それまでの６年間ぐらいは、子ども心の中に父の思い出もあるのですが、なにしろ半分以上は家を不在にしている漁師のことですから、あまり父の記憶はなかった。それでも船の名前だけは憶えていて監督にお話ししました。
　そうすると２～３日後に、「その船はおそらくこの海域にいたはずですよ」という非常に詳しく丁寧なメールをいただきました。その時に、この監督に協力したいとあらためて強く思ったのです。

おんちゃんたちの聞き取りに参加！

守田
　それから具体的な聞き取りに参加されていったのですか？

川口
　すぐにではないです。私は盆暮れには必ず室戸に帰ります。母がおかげ様で元気でいてくれているので。また私は広告代理店の仕事をしていて、この１０年ぐらい室戸のお仕事もいろいろお声かけしてもらえているので、年に３～４回は帰る機会があったので、映画を観た後に「あの漁師のおんちゃんどこにいるのかな」という気持ちを持っていたのです。どこに誰それがいるというのは分っていたのですが、実際に監督と一緒に行動するようになったのは２０１５年の正月からでしたね。

守田
　それまである程度、「読み」はつけておいた、ということですかね。

川口
　そうですね。
　２０１４年の秋には『放射線を浴びたＸ年後』の本も出版されたので、出版記念イベントにもお声かけいただいて、そこでまた監督と再会しました。その後も頻繁にはお会いできませんでしたけれど、メールなどでは情報交換していました。

守田
　みなさん、是非、今紹介されたこの『放射線を浴びたＸ年後』（講談社）という本も読んで欲しいのです。僕も読んだのですが、監督の人となりがとてもよく分る本です。すごく素朴な方で、本当に本音しか言わなくて。
　本には、取材でいかに落ち込んだのかなどとい

うこともいっぱい書いてあります。長い間、この活動にはまったく光が当たらなかったのですね。テレビで取り上げられたのですが、当初は夜中の放送枠にしか当たらない。また放映しても誰も見てくれてなくてまったく割りに合わないと感じる。だけれどもやめられない。そんな思いで関わり続けたことが書かれています。こうしたくだりを読んだら、僕も、是非伊東監督に会いたくなりました。そういう本です。

それでは実際に川口さんがおんちゃんたちに話を聞きに行った時のことを教えて下さい。

川口

「お手伝いできますよ」とは言ったものの、最初から具体的な特定の方を知っていたわけではなかったのです。

ただ手がかりのようなものはありました。母が昭和９年生まれで、同級生の男の人たちは漁師の方も多く、「お母さん、漁師のおんちゃんたちで、今でも元気な人おらんやろか？」と聞いていったのです。狭い街なのに交流はあまりなかったのです、それでも「〇〇さんは元気そうに散歩してたよ」と聞くと、「あ、そう」ということで電話帳を引っ張り出して調べるのです。そして直接、電話を入れました。私は室戸の子で、しかも父が漁師でしたし、母の同級生の人に「私漁師の子で、これこれで」と語りかけていったのです。

室戸のおんちゃんたちは、マグロ漁の黄金期をしっかりと支えてくれた人たちで、もともと私には、ビキニのことよりも先にマグロ船やマグロ漁のことに強い興味があって、いつか何かの形にしたいとも思っていたのです。なかなかそれは実現できていなかったのですが、それで初めはそこからアプローチしました。

でもほとんどの人が「昔のことやから分らんぞ」、「来ても知らんぞ」と言うのですね。だけどそこは室戸の者同士ということで、「いやあ、私のお父ちゃん３６歳で亡くなってねえ、沖の話よう聞かんかったんよ」というふうに話していくと、「うーん、そうかよう」という感じで、しぶしぶ会うことを了解してくれて、それで実際にお会いして、沖の話をしながら、「昭和２９年にえらいおおごとがあったみたいやねぇ」と言うと、ほとんどが、ほぼ全員が、ハッキリとした記憶を持っていました。

「おー、おー、知っちゅう、知っちゅう」。

「わしは焼津で福竜丸見た」。

「魚を命がけで獲ったに、港に行ったら、白いお医者さんのような服着た人が魚を調べに来て、ガーガー音のするやつで調べて、こりゃ汚れちゅう、捨ててこいってやられて」。

魚だけ調べられて、身体は全く調べられんかった人もあれば、頭のてっぺんからつま先まで調べられた人もいました。

「頭をやったらえらいガーガーいうがに、風呂に行って来いと言われた」とかで、お風呂に行ってもう一回帰ってきたら「だいぶ取れたな、そんならＯＫ」という具合だったそうです。つまり除染だったのですね。

魚を沖に捨てに行ったけど油代がもったいないから沖まで行かずに途中で捨てたり、捨てるのもったいないから「これ食べてもどうっちゅうことないぞ」と言って全員で食べたとかいう話も聞きました。

まあ、話がそれぞれの人によって異なるのですけれど、おんちゃんたちの個々の記憶がすぐに出てきました。よっぽど衝撃的に一人ひとりの記憶の中に深く刻み込まれてたのでしょうね。

それまで聞く人はいなかった。家に帰って家族に心配させたくもなかった。それから一番大きい問題は、しゃべってしまうと魚が売れなくなる、売れなくなると困るから「言うな！」と言われたのだそうです。

今でもそうですが、漁師の世界では、船主さん、船頭さんは絶対的な力を持っていて、言いつけを破ったら今度は船に乗せてもらえなくなる。ある

種の村八分みたいになります。そういうことがあってみんなしゃべることはありませんでした。今だからいろんなことを話して下さるけど、当時はそうだったのです。

「〇〇丸の生き残りはワシ一人や」

守田

『Ｘ年後１』を観ると、あの時光を見たとか、太陽のようなものを見たとかありますが、そんな話も聞かれたのですか？

川口

ある乗組員の人は、「お日様が沈んだのにもう一回ポコッと出てきた」とか言っていました。「何かが降っていることに気が付かんかったけれど頭に手をやったら灰だらけやった」とか。光を見て「ワシはいろんな海で航海してきたけどあれはオーロラやないぞ、あの赤さはなんやろ？今でも分らんけど」とか言った人もいました。でも何も見てない人もいるんですね、実際には。

守田

お話しを聞くのは生き残りの方ですよね。その方たちから亡くなった仲間の方たちのことは出ないのでしょうか？

川口

だいたいマグロ船の乗組員は一隻２０人から２３人ぐらいで操業します。話を聞きに行って、「〇〇丸の生き残りはワシ一人や」という人が多いのです。もちろんお話ししてくれる人は今も達者な人たちなのですけれど、その達者な人たちが「自分は生き残ったけど他はみんな若くして亡くなってしまった」と言います。

守田

少し話が飛躍してしまうのですけれど、実は僕は最初に『Ｘ年後２』を観に行った時に先に川口さんにお会いしていて、映画が終わった後にお話しさせていただいたのですが、その時、初めに口から出てきたのは「川口さん、お父さんたちの仇をとりましょう」ということでした。

というのも僕も福島原発事故以降、放射線被曝から命を守る活動をしてくる中で、「被爆者の方が僕の背中を押してくれてる」としか考えられないような不思議で恵まれた出会いがいっぱいあったのです。そんな中で僕には被爆者からの「仇をうって欲しい、無念を果たして欲しい」と言う声が聞こえてくるような気がしていました。

川口さんとの出会いもまさにそうした出会いの一つなのですが、それで川口さんに「川口さん、漁師さんたちが背中を押してくれていると感じるのではないですか？」と聞いたのです。そうしたらお話しして下さったのが今のこのお話でした。辿りつく船、辿りつく船で、最後の一人だけが、まるで聞き取りを待っていたかのように生き残っていらっしゃる。

川口

そうですね。亡くなるまでには個人差がありますからね。うちの父みたいに３６歳で亡くなった場合もあるし、中には２０歳で亡くなった方もいらっしゃる。私の先輩のお父さんは４６歳で亡くなっています。そういう若くして亡くなられたケースがたくさんありますが、実際私が聞き取りをしてる人たちは長生きされた方で、この方の生命力のお蔭なのかなあと思いつつ、でもこの方たちは語るために生かされているのではないかな、みたいな気持ちにもなってきていますね。それぐらいほとんどの方が亡くなられていますから。

守田

でも生き永らえている方も病気とかは結構されているのですよね。

川口

その通りです。若い時からガンを患って、いろんな所に転移して、でも８７歳まで生きておられる方がおられます。

守田

そういう聞き取りの時にですね、監督さんはずっと遠くにいて、カメラ持って待たれていたというお話ですが。

川口

それはですね、おんちゃぉんたち、電話では「おお、来てええよ」と言うのですが、私が行って「実はテレビ局の人と一緒なんよ」と言うと、ほとんどの人が「それはイカン」と言われるのです。そんなおんちゃんを説得して取材を受けてもらうのも私の役目なのです。

監督はその間、ずっと遠くで、カメラを回すことがＯＫになるまで待っているのですね。許可を得ていないのに、ずかずかと上がり込んで撮影できるような人ではないのです。そのために大雨の日に外で遠くで立っていて、私がＯＫサインを送るのを待っている。

そういう態度が今、室戸の人たちにすごく信頼を作り出しています。相手の心に寄り添って、誠実に、地道に取材に取り組まれていることが、どんどん信頼を広げて、室戸の中に信頼感が浸透しているのですね。

守田

そうやって聞き取りをされる中で、お父さんが被曝されていたことについても確信が深まったと思うのですが、そのあたりの経過はどうだったのでしょうか？

父も被曝地域で操業していた！

川口

父のことは、最初にこの映画製作に参加させていただいた当時は、マグロ漁船に乗っていた漁師さんたちの中の一人ぐらいに思っていたのです。実際にどの海域で航海していたとか、魚捨てたなんて話も聞いたことはなかったですし、聞く時間もなかったのです。また「ちょっと調べようがないなあ」と思ったのは船員手帳が手許になかったからです。

父は当時の若者たちがそうであるように、父親（私の祖父）を先の戦争で亡くして、その上子だくさんの家で育ったのです。父には一つ上に姉がいて、下には４人の弟妹がいたので、中学を出た時に勉強したくてもさせてもらえなかった。家族の柱にならなければいけなかったのです。室戸ではそうした男性は、だいたいが一番稼ぎのある漁師になるのですね。伝統です。漁師さんが多いですから。

父が亡くなった時、一番下の妹（私の叔母）がすごく父の世話になっていて、慕っていたということもあって、自費出版で父のことを残したいということで、航海日誌とか船員手帳を引き取ったのです。私の母は、日誌などにはプライベートなことも書いてあるので渋ったのですけれど、結局叔母に預けていたのです。

私は手帳の行方を知りたかったのですが、４年前にその叔母が亡くなったので、調べようがなかった。義理の叔父にいろいろ尋ねたりしましたが分らなくて、やっぱり捨てられたのだと思い込んでいた。

ところが去年の７月に室戸の実家に帰った時に、母の住んでいる集合住宅の一室に、小さな収納スペースがあり、普段は扉の前に物がいっぱいで扉も開けられなかったのに、そこが整理しようと片付けの途中のような状態になっていたのです。私がそこを最後まで整理してあげようと思って部屋を開けてみると、奥の方に古い小箱があって、サイズ的にノートか何かが入っているような箱だったのです。その時、「はっと」と感じるものがありまして、「ええっ！」と思いながら、「まさか！」と独り言を言いながら出してきて、開いてみたら「出たっ！」っという感じで、本当にビックリしました。父の航海日誌と船員手帳が入っていたのです。

私にしてみたらすぐそこにあったものだったのですけれども、多分、映画製作に参加していなければ見つけても「ああここにあった」で済まされていたのだと思います。そんな感じで一番欲しかったもの、父の足跡を追えるものが見つかったのです。

見つけることのできた船員手帳（上）と航海日誌（下）

その時、父が亡くなった時のいろいろな書類なども一緒に出てきました。母はいろいろな手続きを率先してできる人ではなかったので、１２歳の、小学校６年生の私が代わりにやっていて、私の字で書いたものが出てきたのです。手帳を失効させる手続きとか、死亡診断書を取り寄せるとか。もうやらざるを得なかったのでしょうね。

守田

船員手帳とか航海日誌が出てきたのは凄いことでしたね。それにはどんなことが書いてあるのか、みなさん、知らないと思うので教えて下さい。

川口

マグロ船の漁師ということでお話しすれば、乗船するのに船員組合に入って、そして船主さんが雇用しますよってことで、○○年○○月から○○年○○月まで○○丸に乗ってましたという記録がされているのですね。小さな、パスポートみたいな大きさで。それが次の乗船の時にも必要になるし、漁師にしたら一番大事なものなのです。

守田

漁師さんたちは、けっこう、乗る船を替えられることが多いらしいのですが、その手帳がないと船を替えることができないわけですよね。漁師さんたちの収入は、どれだけの漁獲高があるかにかかっているから、漁獲高の多い船を求めて、どんどん船を渡り歩いていったりするそうです。そのために後になってからある一隻の船について、一緒に乗る船の仲間を見つけるのも結構大変だと本や映画で知りました。

ところで『Ｘ年後２』の映画の中では、多くの漁師さんが１９５４年のページを破り捨てていたことも描かれていましたが、お父さんはどうだったのですか？

川口

父の手帳には１９５４年のページはありましたね。

私も延べにすると８０人以上の漁師さんたちの話を聞いてきました。もう船員手帳をなくしている方もあって、その点は、当時、「これは絶対に必要なものだよ」と徹底されていなかったことに原因があると思いますけれど。

でも大事にしている人たちは、長く船に乗っていた人はもう束になるほどのものを持っていました。持っている方の手帳を見せてもらうときには、まず調査をしている昭和２９年のページを見せてもらうのですけど、映画にあったようにそこが破られている人は、私が見た範囲ではなかったです。

確かに映画では、船員保険組合に勤めていた女性が「そう言えば昭和２９年のページを破ってた人もいたよ」と言っていましたが。

守田

被曝の事実を隠そうとしたわけですよね。広島・長崎の被爆者もそうですけど、被害者が自らの被害を隠していかないと生きづらいということがあった。

それで、お父さんの手帳を見られて、お父さん

がおられた所（海域）がハッキリしたわけですね。

川口

ええ、もうハッキリしました。昭和２９年には第二大鵬丸と第五豊丸という船に乗っていて。これをもっと確実なことにしたいと、昨年の夏に厚生労働省に行って情報開示をしてもらいました。手帳だけでなく情報開示してもらえれば、この事実はもっと確かなものになるからです。

確実に魚を捨てていました。両方の船共に。あの汚れた海で操業していて体に影響がないはずがない。しかも当時はまだ冷凍技術のない時代ですから、航海してて１０日ぐらいで野菜が無くなるのですね。ですから航海の後半は釣った魚を食べる。しかも内臓など、珍味なのですね。だからよく食べる。スコールで体も洗う。米も、真水は貴重ですから洗米の最後の時だけ使って、他は海水で研ぐ。

これはもう、まったく影響ないことはありえないなと確信を持ちました。

おんちゃんたちへの思いが募る

守田

お父さんが亡くなった時、お母さんと６歳下の妹さんと３人残されて、「酒の飲み過ぎで死んだんだ」と言われたりして、悲しい思いをされたとお聞きしましたけれども、そのあたりはどんな気持ちだったのでしょうか？

川口

「酒の飲み過ぎで死んだ」と言われて、悲しいのは悲しいのですけど、室戸ではたいていの漁師は早く死ぬとみんな「酒の飲み過ぎ」で片付けられるのですよ。そのためそれを言われたからといって特別な感じはなかったですね。

それがこのように調べていくにつれて分ってくることがたくさんあって。たった２年前に初めてたくさんの漁船が被曝していたことを知って、そこからいろんな話を聞かされて、勉強も重ねて、３・１１以降いろんなところで放射能の怖さも知ってきたことも重なって。

父のことに限らないのですが、人々には何も知らされてきませんでした。マグロにしたって検査されたのは昭和２９年のあの３月１日から１２月までだけで、その後にもう大丈夫だと打ち切られたのですよね。だけどそもそも原水爆による核実験は、終戦の翌年の１９４６年から１９６２年までに１００回以上もやられていたのです。後追いで昭和２９年だけは集中的に対策がなされていますけれど、それ以外の年の水爆実験のあった年にも、父もしっかりその海域を航海しているのです。高知県だけでなく全国の漁師さんたちのほとんどがです。マグロ漁船に限らず、貨物船も、捕鯨船も。えらい大変なことをしていたのだと。歴史的に考えても。あのころは世界的に核実験だらけだったのですよね。

それでもう、私の意識もすごく変わってきました。「父もお酒で命縮めたな」から、「父もそういう目に遭っていた」にですが、多くの船員さんへの思いというか、とても強い憤り、許せない気持ちが募ってきました。

海の男たち。昭和２９年当時、川口さんのお父さんが乗船していた第五豊丸の乗組員の皆さん。右端がお父さんの一明さん。

この問題、とにかく知らない人が多い。私もその一人だったのですけれど。事実の解明というのはなかなか時間のかかることでしょうが、一人でも多くの人にこの事実を、ビキニ事件で何が起こったのかを伝えていきたいというのが今の私の気持ちです。

守田

『Ｘ年後２』の中でとても印象的なシーンがありました。高齢者の介護施設に入られていた漁師さんの一人を川口さんが訪ねて行かれた時に、その方が「自分に来るガンが息子に行ってしまった」とおっしゃっていました。息子さんが３０代後半でガン亡くなったことが説明されて「一番大切なものを取られた」とその方がおっしゃり、観ていて胸がつまったのですけれど、この時の聞き取りはどのようなご様子だったのでしょうか？

川口

ご親戚がその方から「ビキニで光を見たり、海が突然汚れたりした」と語っているのを聞いたと言うことで、「聞き取りはどうですかと」とお声かけいただいのです。それで行きました。その時はまったくそんな話が出てくるとは思っていなくて、見たことをそのまま話していただくつもりだったのです。３回ほど光を見たことなどもお話ししていただきました。

すると突然、その方が、マグロ船から貨物船に乗り換えた頃に生まれた子どもさん、昭和３８年生まれの方ですが、「それがガンになってしもうて、４１歳でのうなってしまったんや」と言われたのです。どう声をかけたらいいものか分かりませんでした。「ワシに来るもんが息子に来てしもうて、それから女房がおかしくなってしもうて」と語られました。ひとり息子さんだったそうで、かなり辛い思いをされたようです。

守田

子どもへの影響について語られたのはその方ぐらいですか。

川口

私が聞いた範囲ではその方ぐらいでしたね。

土佐清水でも２０人ぐらいの漁師さんから聞き取りをしています。先週も土佐清水に行って一番最近の昭和４年生まれの方のお話ですが。その方はいきなり「ワシは１３で長崎に行ってな、三菱で魚雷作っとったんや」と言われました。長崎でも工場で被爆されて、怪我人の救助などをいっぱいされて、その後に土佐清水に帰ってきて、マグロ漁船に乗るようになって、今度はビキニで被曝されたのです。２回被曝された方のお話しでした。

守田

２回も被曝された方のお話は、伊東監督の本の中にも出てきましたね。長崎で爆心地から１.８㌔で被爆されて、その後マグロ船の漁師さんになられて被曝し、病気になってすごく苦しまれて、最後は海に入られて自ら亡くなられている。監督さんは墓前にお参りされたと書かれていました。あの年代はそういう方もいっぱいおられたのでしょうね。

ところで、そのようにおんちゃんたちのお話を聞き取っていかれる上での苦労というか、難しかったことはどのようなことでしょうか？

川口

そうですね。最初に会ってくれるかくれないか、そこのところが一番難しいし大切で、その入口が一番しんどかったですね。

でも最近は本当に変わってきたなと思うのは、一度聞き取りした方にも、「おんちゃん、どうしてる？元気にしてる」とその後も訪ねるようにしているのです。努めて。そうしたらすごく喜んで下さって、あらためてまた話してくれることもあるのですね。そうしたらすごくアットホームな雰囲気を作ってくれるようになり、コミュニケーションもしやすくなりました。今までは縁側からの聞き取りでしたけれど、今度は「まあ玄関から入れや」と言われるようになってきている。

最初はやはり、いくら「室戸の子や、漁師の子や」といっても、知らない人間にいきなり自分の大事な話をするはずがないですよね。ただそれで終わったら仕方がないので、心を開いていただくまでとにかく粘って、辛抱強くアプローチしていく。しんどいのはその過程のことです。

それとご高齢な方々なので、もうすでに４人ぐらい亡くなられています。母から「〇〇さん入院されてるようだよ」と言われて、次に帰った時「まだ入院してるよ」と言われて、その次には「あっ、亡くなったらしいよ」とかいうことがあるのですよ。

若い時にガンを患って、「２回もやってるから

もう大丈夫だよ、もうないよ」と言っていたのに、去年の暮れからまた大腸ガンになって、でも達者で退院してきている人もいます。その方には、今後私の希望として、労災保険の適用申請をお勧めしようとしています。

まだ私自身もよく手続きを知らないのでこれから勉強しなければならないのですが。山下先生たちはプロジェクトを立ち上げて、そういう活動を進めていらっしゃるのですね。第五福竜丸の船員の方々の労災申請で尽力された浜松市の聞間先生という方がいらっしゃるのですが、７人ほど医療費の援助を受けられたのです。その先生に勉強させていただこうと思って、３月にお話を聞いたのですけど、もう申請のフォーマットがあって一人でも申請できるようになっているらしいのです。

一人でもできるのであれば、私が先生からきちんと教えてもらって、それを室戸のおんちゃんたちにお伝えしたい。それも私の役目であればやりたいと思っています。

労災申請を出した先の審査は、第五福竜丸の方たちとは違って厳しいとは思いますが、やらないよりはやった方がいい。「こういうふうに出せばいいのか」と申請しようかという思いが広がっていけばと、新しい一つの希望を持っています。

大腸ガンになったその方にもそのお話をしたら、最初は「もうええ、もうええ」と言っていましたが、「これやってもし通ったら、お金で苦労している人がいたら『ワシでもできるんだな』と希望になるのでどうでしょうね」とゆっくり、丁寧に説明すると、「じゃあ申請してみようか」となってます。

守田

ここはすごく大事なポイントだと思います。これは映画の次の段階のことですが、考え直さなければいけないのは、第五福竜丸は焼津の船でした。『Ｘ年後』で取り上げられたのは高知の船です。でも実際の被害は全国に及んでいるのですね。特に太平洋のあらゆる港から船は出ていますから、その中にはここにおられるみなさんの郷里も含まれているかもしれない。伊東監督はその全国各地で聞き取りをして欲しいと願っているのです。

その時に川口さんがどうやっておんちゃんたちの中に入っていったのか、その経験が重要なポイントになると思います。伊東さんはこの事実の掘り起こしや聞き取りの動きを全国にもっと広げて欲しいと訴えていますね。そのために映画の上映もして欲しいと。これに応えたいと思います。

ところで、川口さんはいつの間にか映画の主人公になってしまっているのですけれど、その辺りについて、監督さんは川口さんにどんなアプローチをされたのでしょうか？

自ら考え、行動する力を与えられた

川口

監督は一切何もしゃべりませんし、ただ私が聞き取っているところを取材させて欲しいということだけでした。もちろんそれが記録になるので「どーぞ、どーぞ、ご一緒に」ということで始めてきたのです。月に一回、多い時は月に三回、四回になる時もありますけど、聞き取りしているところを撮影して記録してもらっています。

最初は私、「お手伝いをします、下働きでもなんでもします」ということで関わっていったのです。カメラが回されていても、私はカメラの後ろにいるようにして。次第に私が聞き取りに協力して下さる方をリサーチしたり、訪ねたりする姿もカメラで追うようになられました。

父の船員手帳や航海日誌が出てきたあたりから、もう少し私をクローズアップしたいと思われるようになったみたいです。その頃から私自身、何となく「写されているなあ」と思っていました。

守田

監督はどう言われたのですか？

川口

「あれして、これして」は一切ないですし、インタビューでも何を聞くかなど少しはアドバイスがありましたけれど、他は何もないのです。私もドキュメンタリー映画は好きですし、少しは身構えるものもあるのではないかと思っていましたけれど、まったく何もない。「ああそうか、これがドキュメンタリーなのだ」と思うようになって。

私の露出がこんなにあるとは、試写会で観るまで知りませんでした。初めての試写会は割と盛会でしたけれど、観てびっくりしました。編集方針の打ち合わせとかも全くないし、何の話もしてくれませんでした。それがドキュメンタリーなんですね。

守田

最後に映画が公開されてこれからのことについて、川口さんが希望されていることについて、みなさんに訴えたいことについてお話し下さい。

川口

まず、一つの映画によって私の意識がこれだけ変わったことが印象的です。自ら考えて行動する力を与えていただけました。伊東監督との出会いも大きかったです。

知らなかったとことは「無かった」ことにされる、知らされなかったことも「無かった」ことにされる。知らさないというのは、事実を「無い」ことにしようと、行なっていることだろうと思います。ビキニに限らず公害でも薬害でも同じようにです。権力を持っている人たちは、これらの事実を、何事もなかったようにするのが、彼らにとって一番平和に収まる道だと思ってそうするわけですが、とんでもないことですね。でもそんなことは神様が放っておかないです。

ビキニについては、伊東監督が、土日もなく、愛媛から何の得もないのに、小さな車で何度も高知へ来て、取材して映像に収めて、南海放送の深夜放送でシリーズで放映して世に出したのでした。でも視聴率は稼げないし、人からは「何やってんだ」と言われて立つ瀬はないし、もうボコボコの状態で辛い思いを延々とされたのですが、「今、自分がこれを止めたら漁師さんたちへの誠意がなくなる」という思いでやってこられました。

皮肉なことに２０１１年のあの悲しい出来事によって、国民のみなさんの意識が放射能に向けられるようになって、伊東監督の『Ｘ年後』がクローズアップされたのですね。その中で、私自身も、たった２年前にこのことを知ったわけです。

これからも私には大きなことはできません。自分に無理を課すとパンクしますし、いっぱいっぱいになってしまうので、できることを一歩づつやっていけばまたそれがどこかでつながるのだと思っています。やはり若い方たちに知っていただいて、事実を継承していってもらえればとても嬉しく思います。

映画は九州から北海道までたくさんの会場で上映をしていただきました。明日は神戸でも上映会があります。そこでもご挨拶する時間をいただくのですが、その時に必ず言うのは、「今日見たこと、初めて知ったことを、お家に帰って、お友達一人でもいい、家族内でもいいから話して欲しい」ということです。そしたらその人たちからまた話が広がっていく。

とにかく一人でも多くの方に、この闇に葬られた事件のことを知ってもらいたいというのが私の願い、希望です。今日、聴いていただいたみなさんにも、是非この事実を広げていただくようにお願いいたします。ありがとうございました。

写真提供は伊東英朗監督（トーク会場の写真は除く）

感想交流と質疑応答の時間　（抜粋）

守田

これからは是非、みなさんからも質問とかご意見を伺いたいと思いますが、初めに僕のことを少しお話させて下さい。

僕にとってもこの映画とのつながりは特別なものがありまして、『Ｘ年後１』は２０１２年に上映されたものですけれど、その前に２０１１年の７月にこの映画の作成に参加された方々が京都に来てシンポジュウムを開かれたのです。高橋博子さんや山下先生などが来られたのですけど、その中に琉球大学の矢ヶ崎克馬先生もおられました。矢ヶ崎さんは内部被曝研究の第一人者で、僕はその矢ヶ崎さんに会うためにこのシンポジュウムに出かけて行ったのです。

２０１１年３月１１日に福島第一原発事故があったとき、僕はそれまで「日本で原発事故があったら政府は絶対に住民をきちんと逃がしてはくれない」という確信があったので、もしもそうなったら、自分の近くの原発だったらとっと逃げる、遠いところだったら逃げることを呼びかけると、前から決めていて、すぐに避難することを訴えだしたのです。

ところがそんな僕も、原発の危険性について見識は積み上げていたのですが、被曝そのものには向い合ったことがなかったので、そのメカニズムについてもよく知らなかったのです。

でもそのことについては専門家がたくさんいるのだから、その内に次々に出てきて、被曝がいかに危険なことかを人々に伝えてくれると思って、そういう人の登場を待っていたのです。ところが待てど暮らせど出てこない。出てこないどころか「被曝はたいして危険ではない。少しなら安全だ」とか言うとんでもない人ばかり出てきて、ひどいことになってきました。この時、「これも俺がやらなければいけないのか」と悟って、すごくショックを受けたことを覚えています。

でももうやるしかないと考えて、ではどうしたらいいのだのろうと思って、ネットをずっと検索していたら、「これは」と思えた方が肥田舜太郎さんと矢ヶ崎克馬さんでした。この方たちのおっしゃってることを広めるのが良いのではないかと思いました。そうしたら岩波書店から「守田さん、『世界』誌上で肥田さんのインタビューをしてくれませんか？」という話が飛び込んできました。

そして丁度、肥田さんにインタビューにうかがう前日が、京都でのシンポジウムの日だったのです。僕はその前に矢ヶ崎さんの書かれた『隠された被曝』という著書を読んで、「素晴らしい。素晴らしいけれど、これを普通の人が読み解くのは難しい」と思っていたので、当日の懇親会の席上で、矢ヶ崎さんの前に飛び出して行って「矢ヶ崎さん、この本を僕に翻訳させて下さい」と言ったのです。今、思えば失礼千万だったのですが、そうしたら矢ヶ崎さんは「そういうことを言ってくれる人が出てくるのを待ってました」とおっしゃって下さった。それで翌日に肥田先生にお会いしてインタビューするとともに、矢ヶ崎さんからのインタビューで構成した『内部被曝』（岩波ブックレット）を作ったのです。こう考えると、この映画のスキームの中で肥田先生や矢ヶ崎さんとも出会えたと言えます。

その後に『Ｘ年後２』ができました。その『Ｘ年後２』を僕に最初に紹介してくれたのは、僕の親友の気功師の方なのですけれど、なんとその方が川口さんと何十年来の友だちだったのです。なんという偶然のつながりなのだろうと思いました。それで川口さんが京都の上映会で挨拶される時、是非、お会いしたいと駆け付けて、お話して、もうその場で今日の対談をお誘いしたのです。

ここでも僕は、核の被害に遭われた方に、その無念さや思いを「お前が代わりに語れ」、そして「人々の未来の幸せに役だたせよ」と言われているような気がしています。それで今日こういう形でお話しさせていただいて、とてもありがたいことだと思っています。この経験を次の何かに大切につなげていきたいと思います。

平

まず感想からですが、私も前作『Ｘ年後１』を観た時、非常に衝撃的で、これで日本の歴史は書き変えられなければならない、教科書も書き換えられなければならない、と思った、そういうインパクトのある映画でした。次の『Ｘ年後２』が公開されると聞いた時、おそらく『Ｘ年後１』で告発された真実がもっと広く明らかにされて、追及されて行くのがストーリーの中心だろうと、いわば面的な広さを勝手に想像していました。

事実そういう側面もありましたけど、『Ｘ年後２』の後半で、８０歳を超えた高齢の方が登場され、自分は生きてるけれど息子が４１歳でガンでなくなったという告白のシーンを観た時、私が直感的に思ったのは、ビキニの被災者にも２世がいるんだというということでした。当然、ビキニの被災者にも家族があり、お子さんやお孫さんがあって当たり前なのですけれど、そのことの深い意味に初めて思い至ったような感じでした。

そして、今にして思えば自分自身迂闊だったなと思ったのは、映画の主人公である川口さんや、それから映画にも登場される漫画家の和気さんたち、あの人たちも、後でパンフレットを見て、年齢とかお父さんの被ばくされた年度とかを見て、２世ではないかと思いました。おそらくご本人たちにはそういう２世とか３世とかいう思いは、私たちと同じようにはないだろうと思うし、そういうことを押しつけるつもりも全然ないのですけれど。

何が言いたいかと言うと、『Ｘ年後１』が『Ｘ年後２』でさらに広がっていくと同時に、それは水平的な広がりだけではなく、世代を超えた深みのようなものをすごく感じたわけです。しかもそれは２世にあたる川口さんのような方が映画の中心になって真相を究めていこうとする、そこに２作目の映画の凄さというか、深みのようなものを、とても強く感じて、今日もとてもいい企画にしていただけたなと思いました。

質問は、今全国で上映会、舞台あいさつもされていますが、全国で聞かれている反応、感想などありましたら是非紹介して下さい。

川口

一番代表的な反応、感想は、「知らなかった」「事実を教えてくれてありがとう」というものですね。ほとんどの人が知らなかった。『Ｘ年後１』を観られている方はある程度知識をもって来られていますが、『Ｘ年後２』で初めて観られた方は、とても衝撃的で、「こんなことがあったのか」と思われます。

他にこんなエピソードもありました。岩手県の宮古で上映会があった時、岩手県は石川啄木の故郷なのですが、父が啄木が好きだったことを知って「啄木の碑が港のこのあたりにあるよ」とか、「私は啄木のこの歌が好きだった」とか言っていただけた方がおられました。父に対して、そうやって思いを込めて観てくれているのだなあと、個人的にはとても印象的でした。

萩原

私は福島県の郡山市から避難してきています。外部被曝はしていないと思いますけれど、いろんな事情が重なって内部被曝したと確信しています。大変な被曝症状が出て、京都に来てから食材を変えたら体調が良くなってきた経験をしています。それで３点質問があります。

① 漁師さんたちは汚染されたマグロを食べたというお話ですが、どれくらいの期間、だれだけの量を食べられたのでしょうか？
② 原発事故後、子どもの避難者の中には乳歯が抜けた後に新しい歯が１年以上もはえてこな

いという人がいます。漁師さんたちの中に似たようなことはないでしょうか？

③ 映画のパンフレットに「文部科学省選定」とあるのですが、私たちは政府といろんな交渉をしていてとても冷たい人たちだと感じています。文科省選定というのはすごいことなのではないかと思いますけれど、どうしたらこんなに選定を受けらけれるのですか？

川口

① マグロ船の漁師は、木造船時代は冷凍設備がないので、氷を積んでそこに野菜とか食料を入れて行くのですが、食料が無くなると釣った魚の傷ものとかをほぼ毎日食べていました。釣ったものを捌いて、生で食べたり、焼いて食べたりしたのですね。１回の航海で４０日ぐらい。年に５～６回は航海に出ていました。

② 歯の抜ける話は、とても印象的な例は、聞き取りの訪問先の方が末期ガンで苦しまれていましたが、話を始めると目がランランと輝き始め、昭和２９年当時のビキニ事件のことや航海のお話をして下さいました。その方は３０代で奥歯のガンになられていました。削って処置されたのですが、若い頃から晩年にかけて全身に転移して、次に訪問した時には亡くなっていました。非常に印象に深く残っている方です。

それから３０代後半で歯が全部抜けてしまったいう漁師さんもいらっしゃいました。その方もビキニで操業されていた方です。

私が聞き取りさせていただいた漁師さんもまだ少なく１００人にもなっていません。いろんな症状にこれからも出遭っていくのではないかと思います。歯についてはそういうことでこれまでに２件ありました。

聞き取りでは病気された時の話を中心に聞いていますので、健康状態など日常の体調についてはこれまでは聞いていないのですね。症状をお聞きすると、盲腸が多かったり、背骨を悪くされている方が多いですかね。私の父は糖尿病があったのですけれど、伊東監督のお話では漁師さんたちに糖尿病の患者さんは結構いるらしいとのことでした。

③ 文科省の推薦は政府とか政治とかは関係なくて、文科省の中の映像部門というところがあって、映像の研究者などが委員となり、その方々が認定審査を行ない、そこで作品が評価されているのだと認識しています。

守田

今の質疑はとても重要なところで、放射線被曝でどういうことが起きるのか、まだ分っていないことの方が圧倒的に多いのですね。だから見過ごされていることも凄く多いのだと思います。私たちの行なった「被爆二世の健康実態調査」でも、行なってみたら、みんな小さい頃よく鼻血を出していたというこれまであまり分っていなかった事実が浮き上がってきたり、二世、三世の間であまり話されていなかったことがいっぱい出てきました。そこに調査の重要性があると思います。

倉本

３つ質問です。

① 妹さんはどういう経緯で川口さんを『Ｘ年後１』を観ることに誘われたのでしょうか？

② 自分とは関係ないと思っていたことが、お父さんとの関係で当事者であると自覚されるようになってきた。その時の感想は？

③ 労災申請は、一人でもできる手続きではあるけれども、それほど簡単ではないと思います。結構勉強しなければならない。高知県にも民医連があるのでアドバイスを受けられればいいのではないでしょか。

川口

① 『Ｘ年後１』の上映が東京で行われていた時、たまたま室戸市出身の人がそれを観ていて、「この映画は室戸でやらな（上映しなければ）アカンやろう」と思って、地元の人と一緒に企画されたのですね。それで室戸市で上映されることになって、それを妹が知って、私を誘ってくれたのです。

② 被曝とか放射能とかは自分とは無縁のものと思っていたので、身近にいた父が被ばくしていた事実を知った時、すごく戸惑いました。自分が二世だということも理解しました。でも今、そのことを率先して話題にすることはちょっとまだできないでいます。二世なんて

いうと、室戸の私の世代、妹もそうですが、ほぼ全員そうなるのですね。さらに日本国中マグロ漁船はあります。マグロ漁船だけではないのです。
一つ聞いたことがあるのは、大型の外洋貨物船に当時乗り組んでいたおじさんがいて、事件後すぐに健康診断を受けたのだそうです。つまり事情を分っていて経済的に対応力があり、かつ意識の高いところではちゃんとそういうことをしていたのですね。ところがマグロ漁船の船員さんたちは全然何もされていない。もし定期健診が義務付けられていたら、ガンも初期に見つかったかもしれない。そういう悔しさも持っています。当事者として。

③ 労災申請のアドバイスありがとうございます。申請手続きは、私ぐらいの人間でもできると思っています。ただその先は非常に難しいということは私の耳にも届いています。第五福竜丸のみなさんの申請は受理されましたけど、他のマグロ漁船の船員さんたちの申請は非常に険しい途が待ち構えているのでしょうね。でも、何人も何人もやっている内にかなうこともきっとあるだろうと思っています。それが今の私の支えです。

井坂

午前中の原水爆被災者懇談会の総会でも報告があったのですが、昨年が被爆７０年で、被爆者の平均年齢も８０歳を超えました。８０歳も超えて被爆者がどんどん亡くなっていく中で、あの被爆当時、広島・長崎で何が起きたのかを語る人がどんどん少なくなっている。それで、川口さんがおっしゃいましたが、１９５４年のビキニで、働き盛りの３０代の方たちが経験したことというのは今の被爆者の平均年齢と合致しますよね。

私の父も昨年８７歳で亡くなりました。父が当時のことをしゃべりだしたのはその一年前なのです。それまでは私がいろいろ聞き出そうとしてもなかなか語ろうとはしなかった。亡くなる一年前になって鮮明に記憶していたことを突然しゃべりだした。入市被爆して見た光景を思い出して語りながら「あんなむごいことをしてはいけん」と言いました。

川口さんが一生懸命聞き取りされている被曝された人たちの思いというのは、船主などから言われて、自分の中では何とか被曝というものを消し去ろうとしてきた思いが、解きほぐされたということがあったのではないかと思います。

素朴な質問ですが、映画のタイトル『Ｘ年後』ですが、Ｘの意味は、Ｘ年後とはどれぐらいのイメージなのかと。今、福島原発事故という大きなことがあって、それはわりとオープンに語られていて、今がＸ年後ではないかという気がしながら、でもまだまだ隠蔽しようとする動きがある中で、国民的、世界的に明らかにしていくＸ年後というのがこの映画のテーマなのかと思いますけど、映画製作に参加された川口さんの思いと、守田さんのＸ年後についてのお考えを聞かせて下さい。

川口

Ｘ年後というのは、起こってから、どれぐらい経てば何かが分るという一つの暗示としてのＸだと思うんですね。実際にビキニ事件に関しては、山下先生や伊東監督は長く関わってこられましたけど、世の中にはまだほとんど伝わっていないというのが現状だと思うのです。被曝をされた方も高齢になられてきましたが、高齢になってしまって消えていくのを待つことはできません。着地点はないと私は認識しています。

守田

「Ｘ年後」というタイトルを監督がつけた理由はさきほど紹介したこの本の中に書いてあるのですが、僕が思うのは、Ｘ年後は多分一人ひとりにとってのＸ年後なのだと思います。Ｘ年後が実は数ヶ月後だった方もあるのですよね。漁から帰られてすぐに亡くなられた方もおられたわけですから。これまで僕が見聞してきたことからすると、人間の放射線に対する感受性には個人差、個体差が相当あるのだと思うのです。感受性が強い方は影響が早く出るだろうし、弱い方はもっと後から出てくる。一人ひとりにとって、Ｘ年後がそれぞれにあるというのが実際ではないでしょうか。今Ｘ年後が来ている方もあるし、もっと早く来た方もある。逆に大丈夫な方もあるでしょう。

一般参加者

先ほど被ばく二世という言葉がありましたけ

れど、私は４０歳で、親は１９４６年生まれです。１９６２年まで頻繁に核実験されていたので、ひょっとしたら私の親も被ばく者で、私も二世かもしれない。食べものにどれほど放射性物質が当てられているか分りませんが、ひょっとすると私自身が被ばく当事者かもしれないと思いました。

川口さんにお聞きしたいのは、聞き取り調査をされていて、怒りはありましたか？映画を観ていると、真実を明らかにしようとするすごく強いメッセージがあるわけではなく、淡々と「こういうことがありました、ああいうことがありました」というふうに映画は構成されていたように思うのです。「アメリカが憎い」とか、「日本政府が悪い」とかおっしゃるわけでもなく、大変な人にはこんなサポートをしていきたいとおっしゃるわけなのですけれど、怒りというものをどこかに向けられていなかったのかな、ということをお聞きしてみたかったのです。

川口

いろんなことを知るごとに、何も知らされていなかったおんちゃんたちのことを思います。第五福竜丸でさえも、あの時、読売新聞のスクープがなかったら闇に葬られていたのだと思います。１９５４年の１０ヶ月間の記録は確かにあったので、情報開示を求めて父のことを知ることができました。怒りはやっぱりあります。何も漁師に通告しないまま「無かったことにしよう」とされたことにやっぱり怒りますよ。怒りますけど、拳を挙げて政治や思想を語ることは私はしない。私の知恵や能力のこともありますし。

漁師のおんちゃんたちは格好いいです。話していても苦労話や恨み話は言わない。思い出話と武勇伝ばかりです。魚を捨てたことはおそらく怒っているのでしょうけど、本当は漁師のおんちゃんたちこそ怒って当たり前なのですけれど、そういう態度はしないのです。そういう漁師のおんちゃんたちに寄り添っているわけですから、私がけしかけるような訴えをしようなんて気持ちには絶対にならないのです。怒りはあります。ありますけどそれを表に出してヒステリックに叫ぶようなことは今後も多分ないでしょう。

守田

映画を観ていて思いましたけど、まず「捨て置かれた被害者」という前に、すごく誇り高く生きてきた漁師さんたちの姿と、それに思いを馳せようとするものが強く出ているのですね。そしてその中に悲しみとか怒りとかも折り込まれているのだと思うのです。漁師さんたちも、悲しみ、怒りをぶちまけるのではなくて、雄々しく生きてきた自分を保とうとして語られているのではないかと思いました。

それに本当に寄り添って、そのスタンスからこの時にあったことを語り継いでいった方が、真実がより伝わるのではないかという気がしています。漁師さんたちに寄り添っていて、そんな漁師さんたちが次々と亡くなっていってきたことに深い悲しみと怒りを持ちながら、しかしそれ以上の愛情でもってこの問題を解き明かしていくことが大事なのだと思います。すべてのみなさんの幸福のために、この漁師さんたちが辿ってきたことを明らかにしていくことが大切だし、漁師さんたちも何よりもそれを望まれているのではないかと思います。

川口

最後に、今日はみなさん長時間ありがとうございました。守田さんにかなりフォローしていただきましたが、私の拙い話がみなさんにどこまで届いたか不安です。とにかく一人でも多くの方々にこのビキニ事件の真実を知って欲しいと強く思っております。

本当に今日はありがとうございました。

（了）

室戸の港と町

記念トーク参加者の感想から（抜粋）

■今日のトークや、会場からの質問、そして今までの自分が人生で体験してきたことを通して、日本中すべての人々が大なり小なり自分が認識しているよりはるかに高濃度に被ばくしているんだと感じました。

私は医療関係者ですが、７年ほど前に、先進国の中でガンの発症が伸び続けているのは日本だけだと聞きました。みんなが被曝者なので、少しづつそのことに気がついて、皆がつながって輪が大きくなっていけばいいなと思いました。

（初参加、非会員）

■映画を観たので是非お話を聞いてみたく思いました。(『Ｘ年後１と２』)

お忙しい中貴重なお話をありがとうございました！今後も是非多くの人に語りかけ、また高知での貴重な取材を続けていただき、ヒバクシャの生活や医療の向上がされることを願っています。（京都「被爆２世・３世の会」に対して）

貴重なとりくみをありがとうございました。今後もこのようなとりくみをお願いいたします。

■その時の日本全国の港町で、子どもたち全てが被ばくを受け継いでいるという重みが、川口さん

が語られる姿、口調からあらためて届いてきました。
（京都「被爆２世・３世の会」に対して）
　これからもこのような大切な機会を作っていきましょう。毎月の例会も楽しみです。

■私の母は８８歳。長崎で被爆し、たまたま友人と２人、昼休み当番でコンクリに囲まれた食堂の準備室に居たので助かったものです。爆心地から１.５ｋｍの三菱造船所工場ですが、もうその時の人々は今はその友人と２人しか鹿児島では生き残っていないようで、その友人も寝たきりで、直接の被爆を知っているのは「自分だけだ」と私には語っています。
　お父様、無念でした。私は鹿児島から帰る際は、いつも母親を我が手で思い切り抱きしめてから帰るようにしています。
　枕崎、志布志など鹿児島にも遠洋漁業の漁港がありますが、なんとか聞き取りできないかと思いました。　（谷口公洋）

■貴重なお話をありがとうございました。無知だった私は、福島原発事故後にヒバクという問題を知り、向き合ってきました。そして、ヒバクの問題は現在だけの問題ではなく、過去から未来へずっと続くことだと知り、愕然としています。
　ということは、福島原発事故以前のこと、水爆実験、原爆、なぜかその時のこと、それがあったという事実は知っていても、その後どんな影響が出たのか何があったか、どれだけの人が苦しんだか、知らされずにいる、隠されていることも、知らなきゃいけないと思って、今日参加しました。
　以前講演でお聞きした、守田さんの「日本全員が被ばく者だと思う」という言葉がとても印象に残っています。その言葉と共に、川口さんのこと、この映画のことを伝えていきたいと思います。どこか他人事だと思われている方に届くように･･･。

■川口さんの経験も感動しましたが、守田さんのコーディネートも素晴らしかったです。多くの人に聞いてほしい「内容」でもありました。
　妹さんの薦めで見られた「一本の映画」が、これ程「人」を変えるものでしょうか？まだまだ我々の知らない事実が隠されている、と知らされた。川口さんの「知る」ことから「行動」へ移された「変化」には、感激いたしました。支援・支援と口では言いながら、なかなか行動に移せない自分が、恥ずかしくなりました。「知らなかった事」「知らされなかった事」は「無かった事である」という指摘等、言葉一つ一つが重い意味をもっているように、感じました。
　しかし、当時「マグロ漁船」に乗っていた漁師は、二十歳前後の若者であったのでは、その後の人生を想像すると、「今頃、来ても遅い」という発言も……
「Ｘ年後」という言葉のもつ意味、守田さんの解説で、ようやく理解できました。「本」も読んでほしい、という提案も納得。私も映画を見てから「本」を読んでよかった、と思っています。監督の意外な経歴にも、ビックリしましたが。
（石角敏明）

■参加させていただきありがとうございました。放射線のこわさ、被爆の事実を知らされること、はじめて知った人たちが、特に若い人たちが、また、人に知らせていくことの大切さを感じました。
（宮永宣代）

■川口さんのお話を聞いて、放射能被曝を隠蔽し続けてきた、だから今も隠蔽しているこの国の政府のやり方に改めて憤りを感じました。お父さんの死が核実験のせいではないかと彼女が思い始めたのがたった３年前、それも一つの映画を見てからというのがあまりにもやるせないです。
　恨み言を言わず生きてこられた室戸の元漁師さんたちが、漁師の子だったという彼女に心をひらいて証言をされる…おそらく彼らの心のどこかにずっとあった、だけど誰も聞いてくれる人がなかった体験、当時、表沙汰にすると魚が売れなくなる、でも目の前で仲間が次々に亡くなっていく……どんなに不安で複雑な思いであったことか！怒りで震える思いです。私は、この哀しい体験を彼女に話すことで、元漁師さんたちはきっと救われた気持ちになっておられると思います。
　真実を知ったからには見てみぬふりはできない、この映画に関わられた方たちの思いにこたえ

るためにも、この事件を広く知らせていきたいと思います。

（吉田妙子）

■２３日、今日は午前が京都被爆者懇談会総会、午後が同じく京都被爆２世３世の会の総会があった。

全国の被爆者健康手帳所持者の平均年齢は 80 歳を超え、所持者数も昨年３月現在で１９万人台を割っており、京都府内の所持者数も１０６５人となり、昨年より３７人減少している。今日の総会に出席する被爆者の顔を見ても高齢化が進み、昨年の総会に出席していた顔も減っており、とても寂しい。

昼の２世３世の会総会では二部企画として、記念トーク「父の死が放射線のためだと知った時」と題して、「放射能を浴びたＸ年後 2」に出演した川口美沙さんと２世３世の会会員でもあるフリーライター守田敏也さんのトークがおこなわれた。

（中略）

トークの中で川口さんが紹介した元漁師の証言が胸に突き刺さる。「子どもができたがガンで死んだ。わしがガンになるところだったのに子どもにいってしまった。それで妻もおかしくなってしまった」「長崎で被爆し高知に帰り、今度はマグロ漁船で被ばくした」「マグロを沖に捨ててこいと言われたが捨てずに自分らで食べた」・・・・。

川口さんは言う。「事実が知らされなかったことは、国が被爆がなかっとこにしようとしたこと。それが許されない」

守田さんは言う。監督の著書を紹介しながら「題名のＸ年後とは、一人ひとりのＸ年後であり。福島原発事故の際に、国はただちに（人体・健康への）影響はない、と言ったが、ただちにとはいつのことか、それがＸ年後だ」

川口さんのトークの中で映画の中のように、元漁師に取材した被ばくの実態とその後の健康被害を淡々と紹介される。その抑えた口調がよけいトーク参加者の胸に迫っていった。

「Ｘ年後２」はＤＶＤ貸し出しで自主上映できる。是非みなさんにも観て欲しい映画である。

（井坂博文　Facebook より）

■映画はまだ見ていないのですが、奮闘されている事は肌で感じました。

大竹まことさんのユーチューブでゴールデンラジオの放送された中で、伊藤英朗氏を招いて「放射線を浴びた２」についてトークをされていました。

東京オリンピックが開催される中で現在の築地市場を選手村として利用されるそうです。その地下には大量の被爆マグロが埋められている。その証としてひっそりとプレートが設置されています。築地市場跡地を改装される中で、プレートの存在はどうなるのか心配です。プレートを無くせと言う圧力がかかれば、今の舛添要一都知事には、撥ね退ける力は無いでしょう。それが少し不安です。

（佐々本好信）